

## 小学校家庭科にみる現代家族と生活（4）

浅井 由美

### はじめに

「日本人の国民性調査」（統計数理研究所）によれば、「一番大切なもの」に「家族」をあげる人は44%（2013年）で、最も多い。家族の機能は多面的だが、それらを総括して、家族は「幸福追求の集団」といわれてきた。

「国民生活に関する世論調査」（内閣府）によれば、家庭は、「家族のだんらんの場」（66.0%）「休息・やすらぎの場」（63.7%）「家族の絆を強める場」（53.9%）などの意味をもっている。

ところが、家庭の教育力低下、離婚やひとり親家庭の増加、子どもや高齢者に対する虐待、DV、子どもの貧困、自立しない若者など、家族や家庭をめぐる問題は多い。

現代の家族は、大切なものと認識されているが、大切にしなければ壊れる脆弱さも持っている。たとえば、保育の家庭支援の分野では、すべての子育て家庭が、何らかの支援を必要としていると考えられている。

家族とは何か、どのように大切かは、社会や文化によっても個人によっても、差異があるだろう。家族を最も取り扱う科目である家庭科は、一番大切だと考えられている家族やその生活を、どのようにとらえ教えようとしているのだろうか。ここでは、拙稿「小学校家庭科にみる現代家族と生活（1）～（3）」をまとめた。なお、家庭科教科書は最新（2015年発行）のものでなく、（1）～（3）で用いた教科書とする。

### 1 家庭科の中の個人

「家庭」科は、当然のことともいえるが、「家庭生活」を大切にしている。小学校学習指導要領第2章第8節家庭では、「家庭生活」という語が繰り返されている。家庭科は、家族の集団

性がゆらぐ現代において、個人より家族を重んじ、家庭中心の考え方をしている。

家庭科の学習指導要領の内容A（1）アは、「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」となっている。ところが、家庭科の教科書は、自分自身について、自分がどのように成長してきたのかなどについて、書いていない。「自分の成長を支えた家庭生活の大切さ」に感謝したら、自分にできる家庭の仕事を増やそうと続けている。

その後は、衣食住の知識や生活技術に多くのページ数を充てて、「家族のためにトライしよう」「家族のためにお茶を入れよう」など、「家族のために」を繰り返している。

『小学校学習指導要領解説 家庭編』には、「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、生活における自立の基礎を培うとともに・・・」（文部科学省2008, p.8）とある。衣食住などの生活に関する知識と技能を身に付けるのは、まず自分自身のためであろう。しかし教科書は、自分の生活者としての自立よりも、「家族のために」を重んじている。

金銭についても、収入は所与として、それを有効に計画的に使うこと、つまり消費すること教えている。働いて収入を得ることや経済的な自立の厳しさを考えさせてはいない。

成長し生活者として自立した個人が、家族をつくり、家庭生活をよりよくしていくものではないだろうか。ところが、家庭科は、家族や家庭生活を中心として成り立っていて、個人の生活者としての自立には関心が薄い。

### 2 家庭科の中の家族①

学習指導要領は、家庭科の目標を「家庭生活を大切にす

て生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」としている。「家庭生活への関心を高め、その大切さに気付くようにする」とも述べている。

ところが、家庭科は、「家族とは、家庭生活とは」にも、関心を示していない。個人の生活者としての自立より家族や家庭生活に重きをおきながら、家族や家庭は所与のものとしている。

家庭科教科書は、「家族」という語を多用するが、家族そのものについてページを割いていない。また、父、母、兄弟姉妹、祖父母など、特定の家族構成員を指す語も使っていない。親子関係、きょうだい関係、親類との関係などには言及していない。

その一方で、家庭科の教科書は、家族の写真やイラストは多く掲載している。掃除や料理をする男女の子ども、ごみ捨てや配膳をする父親らしき男性も、働く母親らしき女性も登場する。「協力」という語も多用しながら、男女共同参画社会にふさわしい家庭生活を描いている。

小学生だけでなく乳幼児も、祖父母らしい高齢者も、よく登場する。少子高齢社会を迎えて、高齢者とのかかわりを大切することと、3世代が同居する伝統的家族の存在も提示している。

教科書には、核家族や拡大家族、専業主婦のいる家族や夫婦共働きの家族などという記述はない。同様に、ひとり親家族、別居家族、親が離婚した家族、ステップファミリーなどの記述もない。

ただし写真やイラストをみるかぎり、専業主婦のいる戦後日本の標準世帯モデルなど、一つの家族像だけを想定してはいないようだ。

### 3 家庭科の中の家族②

教科書では、家族の写真やイラストを登場させる際、食卓がよく使われている。料理の内容は別として、食べるのには困らない豊かな社会の平等な家族を表現している。また、孤食、個食、バラバラ食などではない、家族そろって食事をする食卓を提示している。

かつて円地文子の小説『食卓のない家』でみられたように、食卓は家族の象徴だろう。近年では『変わる家族 変わる食卓』の著者である岩村暢子が、食卓から家族の崩壊をとらえるとともに、家庭科教育の批判もしている。

K.E.ボールディングは「ひとつのテーブル（ラテン語ではメンサ、commensality で共生体）を囲んで座る家族は、統合的な贈与経済の一例である。そこでは、食糧は、何らかの交換の原理にしたがってではなく、必要に応じて分配されている」（K.E.ボールディング 1977, p.81）と述べている。ボールディングによれば、ほとんどの贈与の動機は、「愛」と「恐怖」の混合体である。

家庭で一つの食卓を囲んで食事をするメンバーには、大人も子どももいる。男性がいて、女性がいる。働いて収入を得る者がいて、働かない者がいる。それでも、家庭では、誰もが、能力に応じて貢献し、必要に応じて分配を受けることができる。そこで家族は、愛情の源泉といえる。それゆえに、家族は、ときには憎しみや暴力の源泉にもなる。

学習指導要領は、目標に「家庭生活を大切に作る心情をはぐくみ」としながら、家族関係や家族の具体的な心情には言及していない。

小学校家庭科には、人の誕生も死もでてこない。家族は子どもを産み育てるとともに、死者を送り先祖祭祀を行っている。学習指導要領は「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」を内容に挙げてはいるが、出生、成長、成熟、加齢、老衰、死など、人が家族の中で不可避に経験するであろうことを扱っていない。

家庭科教科書は、「楽しいだんらん」「生活を楽しくしよう」「家族との楽しい食事を工夫してみよう」など、「楽しい」家庭生活であふれている。しかし、親子や夫婦の不和や葛藤、病気、失業、貧困、暴力、生別死別など、家族の悲しみや不幸は書いていない。

家庭科は「家族の幸福とは」についてもふれていない。教科書は、家族の幸福もとりたてて書かず、家族写真は明るいが、とくに幸せそうでもない。

ライフコースにおいて誰もが経験するように、家庭は、常に明るく楽しいわけではない。家族には、苦しみや悲しみもある。私たちは幸不幸両方を通して、家族の絆や大切さを学ぶものなのではないだろうか。

家庭科は、現実の家庭の楽しい側面も楽しくない側面も客観的に見るのではなく、問題のない明るい家庭を前提としているようだ。

#### 4 問題ない家庭の正しい衣食住

「国民生活に関する世論調査」（内閣府）によれば、「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」人が63.1%（2014年）である。

モノあふれる時代、料理ができなくても裁縫ができなくても、生活は成り立つ。豊かな社会、福祉国家では、家庭がなくても生活することはできるだろう。

家庭は、よりよく生活するためのモノ、カネ、ヒトのシステム、生活組織の一つととらえることができる。モノやカネを実際に使うのはヒトであるので、どんな組織でもヒトが最も重要である。とくにモノを作る組織でも利潤（カネ）を追及する組織でもない家庭では、家族一人ひとり（ヒト）が大切だろう。

現代家族には、衣食住（モノ）ではないヒトの問題があり、それは、衣食住の生活技術が優れていても解決できない場合が多い。

しかし家庭科は、問題のない明るい家庭の衣食住を教えようとしている。教科書が多くページを割いているのは、衣食住のモノに関することである。家庭は、モノを消費する場ととらえられている。

学習指導要領は「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な

基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、・・・」と、教科における「学習方法」の特質を述べている。

家族や家庭そのものは所与としておいて、「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して」という「学習方法」が、「家庭生活を大切にする心情をはぐくみ家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことに最も有効かは疑問だ。

また「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能」とは、家庭の衣食住だけではない。衣食住以外の「基礎的・基本的な知識及び技能」も「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して」という「学習方法」をとるのだろうか。自らを家庭生活に限定する、視野の狭さを感じさせる。

家庭科教科書をみると、「衣食住・・・」が学習「方法」ではなく、「目的」であるかと思うほど、圧倒的ページ数をとっている。家庭科教科書が最も教えたいことは、衣食住に関する生活技術や知識であるようだ。

#### 5 生活の合理化と生活文化の伝承

家庭科は、家族や家族のメンバー（ヒト）やヒトの持つ時間（トキ）や金銭（カネ）よりも、衣食住のモノを中心としている。そのモノへのこだわりにも特徴がある。

電気炊飯器を使わず鍋でご飯を炊いて、炊飯の基礎を教えている。洗濯機を使わない洗濯や、掃除機を使わない掃除を教えている。家庭ではほとんどしないだろう手縫い、手作りも教えている。家庭での普及率が低くなっているミシン縫いも教えている。

家事の社会化・外部化がすすんでも、家庭科は、手作りを重んじている。ここでは、時間持ちの専業主婦がいる家庭を標準としているようだ。

普及率が高くても、電子レンジ、パソコン、ケイタイ、冷蔵庫、エアコン、オムツ、おもちゃやゲーム、自家用車、家庭薬などは扱って

ない。またマニュアルをよく読んで正しく使うという基礎的・基本的なことは書いていない。教養娯楽、塾、習い事、生活の約3分の1をしめる睡眠と寝具なども扱わない。

家庭科が考える家庭生活の基礎・基本があって、それを優先させている。家庭科には、家庭科が考える正しい生活、正しいライフスタイルがある。

たとえば、伝統的なご飯とみそ汁の合理的で正しい調理法を教えている。家庭で、親から子へ生活技術や生活文化の伝承ができにくくなったことを示している。同時に、家庭科が正しいとする生活技術を教えることが、家庭の味を伝承しにくくさせているともいえる。

ご飯とみそ汁にも、家庭独自の調理法と微妙な味があるはずだ。合理的でないかもしれないし正しくないかもしれないが、家庭の衣食住には家庭のやり方があるだろう。このようなことはアメリカの家政学でも指摘されていて、ローラ・シャピロは、合理主義的「家政学の間違い」と批判していた。

衣食住の生活技術は、「工夫して」「計画的に」「じょうずに」「かしこく」「手順よく」などで表現されている。教科書はPDSやPDCAサイクルをもとに、合理的、効率的なハウツーを書いている。

たとえば、家庭のだんらんを、家庭科教科書は次のように扱う。「かんたんな食べ物とお茶を用意して、だんらんを持つ計画を立て、家族とのふれあいを深めましょう」、「家族とふれあう工夫をしたり、だんらんの場をもつ計画を立てたりしましょう」。

家庭科では、だんらんやふれあいは、計画し工夫するものになっている。現代家族は、「家族する」ことを教えなければならないほどになったということだろう。子どもがだんらんを計画してふれあう家族を、家庭科は正しいとして教えている。

家庭科が導入しているPDSやPDCAサイクルは、本来、大組織の意思決定、マネジメント

に使われるものである。計画を達成するために、全体の仕事を局・部・課・係と部門化し、人も局・部・課・係に部門化専門化し、彼らを指揮して計画通り実行させ、その結果を統制するという管理論は、企業や官庁、軍隊など大組織には当てはまり有効である。

しかし家庭では、企業などの組織と違って、合理性を貫徹できない。家庭の調理は、動作研究、時間研究、動線研究等からマニュアルがつけられるファストフード店の調理とは違う（住居の分野では、台所の動線研究などを導入しているが）。家庭の掃除は、掃除会社のスピードクリーニングとは違う。生活時間についても、家庭の時間は、学校の時間とも企業の時間とも違う。

実際、家庭科も、合理性や効率を取り入れる一方で、時間持ちの専業主婦がいる家庭でなければ作らないようなものまで、材料費も惜しまず手作りしている。中途半端な合理性にとどまっている。

家庭の労力、時間、お金の使い方は、ときに非合理的にもみえる。手の込んだ料理、時間と手間をかける育児、無駄かどうか関係なく子どもに使うお金。無駄、浪費、非効率にも、その家庭なりの意味がある。

家庭の経営センスは、学校の教室では伝わらず、家庭生活の中で伝えられるものだろう。合理性、計画性と家庭の生活文化は、相容れない場合もある。家庭科は、家庭の機能の一つである生活文化の伝承よりも、家庭科が正しいとする家庭生活を教えようとしている。

## 6 家庭生活中心と実践的態度

家庭科は、経済・社会の変化の中で、その内容を少しずつ変化させている。情報化、キャッシュレス化、高齢化、消費者問題、環境問題、地域コミュニティの崩壊などに、家庭科は次々と対応している。ただし、共働き家庭の増加、子どもの貧困率の上昇、離婚の増加など、家族や家庭生活の変化には、影響を受けていない。

その対応のしかたは、家庭生活の「工夫」という表現で登場することが多い。たとえば、教科書には「生活時間を見直して、家族とのふれあいの時間を工夫する」とある。個人の時間より家族の時間を優先する一方で、ワークライフバランスを社会に対して主張していない。対応は、家庭の中の工夫や協力だけに限定されている。

塾や習い事で忙しい子ども、長距離通勤と長時間労働の親、家族のメンバーはそれぞれに忙しい。また情報化の進展によって、家族の時間は、家庭外からのメール等で侵食されている。

生活時間配分（家庭のトキの問題）を、子どもの工夫や家庭の努力で改善するには限界がある。家庭の生活問題の多くは、教育、労働、経済、社会全体の生活問題から家庭を切り離しては、解決できない。

家庭科は、家庭のカネについて、収入は所与とし、それをどのように計画的に使うかを扱っている。PDSで「じょうずな買い物」「かしこい買い物」をすすめている。家庭は、単なる消費の場として扱われている。

貯蓄の目的や家計の3大出費である住居費、教育費、老後の費用にはふれていない。そこで、住宅問題や教育問題、高齢者問題もでてこない。子どもにとって身近な問題であっても教育費を扱わず、3世代同居の伝統的家族の写真相も掲載するのに、年金問題や介護費用を扱わない。

その一方で、消費生活を環境問題には関連づけている。限りあるモノやカネの大切さに気づき、環境に配慮した消費生活をすすめている。豊かになった家庭を反映して、質素儉約ではなく環境のためを強調している。

環境問題は、個々の家庭だけで解決できることではなく、社会全体で、さらには国際的にも取り組むべきことである。しかし、環境問題の社会的・国際的取り組みや、食糧を初めとする消費生活の国際化にはふれていない。

消費者の多くは、生産や販売もしている。消費者側の論理と生産者側の論理は対立する場合

もあるが、家庭科は、消費者の視点のみで、消費と環境問題を扱っている。大量生産、大量販売、大量消費、大量廃棄をめぐる、消費者でありつつ、生産も販売もしている生活者が抱える矛盾には言及していない。

家庭科は生活を総合的にとらえているのではなく、生活を不自然に切断している。視野を家庭の中に限定して、生活問題を考えている。生産労働から排除された専業主婦が、与えられたモノ・カネを「工夫して」「かしこく」使うように、家庭の中だけの、いわゆる「ヤリクリ・キリモリ」にとどまっている。

学習指導要領の「実践的な態度を育てる」の「実践的」とは、限定的なものとなっている。「家族の一員として生活をよりよくしようとす実践的な態度を育てる」のであれば、家庭の外にも目を向け生活を総合的にとらえ、はたらきかける必要があるだろう。

## 7 家庭の主体性

家庭科の生活とは、与えられた条件の中で「工夫する」ことになっている。教科書は、地域コミュニティの崩壊に対応して、地域の人たちとの交流をすすめても、地域の人たちと行政や企業にはたらきかける活動は書いていない。社会からの要請に応えるが、生活者として社会に要求はしていない。

家庭科は、社会に求められることを求められるままに、その内容に受け入れてきている。雑多なことを引き受けている。家族の幸福な生活とは何か、家庭でどのような生活がしたいかということよりも、社会から要請され社会にとって都合のよいライフスタイルを教えている。

これは、家庭が単なる消費の場になり、生活組織としての地位が低下していること、家庭に生活組織としての主体性がないことを示している。

家庭科には、専業主婦のいる家庭を標準にしていると思われる部分が多々ある。しかし家庭の機能は外部化し、私たちの生活は、様々な生



活組織に支えられている。現代の家庭は、専業主婦がいて生活組織の中心だった、かつての家庭には回帰できない。

消費生活において質素儉約のかわりに環境への配慮を強調したり、PDS で家事の合理化をすすめたりすることにみられるように、伝統的な家庭生活が崩れた後、新しい家庭の経営理念や価値がないということだろう。

経済・社会の変化の中で、家庭は、新しい家族の価値観、新しい家庭の経営理念や生活文化をもてないままであるといえる。

#### 参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説 家庭編』東洋館 2008

小学校家庭科教科書『新しい家庭 5・6』東京書籍 2011

小学校家庭科教科書『わたしたちの家庭科 5・6』開隆堂 2011

飯塚信雄『男の家政学』朝日新聞社 1986

岩村暢子『変わる家族変わる食卓』勁草書房 2003

梅棹忠夫『女と文明』中央公論社 1988

佐藤光「家庭科教科書に見る『家庭の崩壊』」『This is 読売』9 読売新聞社 1997

鶴田敦子『家庭科が狙われている』朝日新聞社 2004

K.E.ボールディング 公文俊平訳『愛と恐怖の経済 贈与の経済学序説』佑学社 1977

ローラ・シャピロ 種田幸子訳『家政学の間違い』晶文社 1991